

Title	ヴァンス・パッカード著 野田・小林訳 地位を求める人々
Sub Title	The status seekers, by Vance Packard
Author	石坂, 巖
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.6 (1960. 6) ,p.557(59)- 560(62)
JaLC DOI	10.14991/001.19600601-0059
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600601-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

労働組合、および公共の利益を代表する三者構成の高等労働委員会 (Higher Council of Labour) の設立を提案したのであった。

この多数者報告の勧告にもとづいて、一八九六年調停法 (Conciliation Act) が制定された。そして間もなく各地に三〇〇もの地方調停委員会が建設された。著者によれば、本来、イギリスの産業関係は労資間の自発的な交渉によるものであり、政府はこれに介入しないのを原則としていたが、新組合運動の発展後、基礎の脆弱な組合が困難におちいったような場合、強制仲裁制度がとられ、とくにニュージールランドやオーストラリアにおいてはその傾向が見られたというのである。しかし二〇世紀初頭の産業関係の最大難問は、苦汗制度のもとに強力な労働組合の保護もなく、奴隷的な低賃金に悩んでいた不熟練労働者群であった。今世紀初頭、イギリス帝国主義の侵略政策は、ボア戦争となってあらわれ、前世紀末の新組合運動によって奪われた失地を恢復しようとして、おしすすめられた労働組合運動にたいする反動攻勢は、労働組合の法的保護をも奪ったタッフ・ヴェール事件となってあらわれた。しかしそれ以前にすでに低賃金労働者は、半奴隷的な労働条件のもとに、長時間労働と不潔な環境に苦しんでいたのである。

著者は、これらの不熟練労働者をして、ひとつの新しい勢力たらしめた新組合運動の力を高く評価せずに、上院委員会による最低賃金制の方式、監督官庁による職種別の賃金率の制定など、わが国の最低賃金方式、自民党のいわゆる業者間協定に酷似したような上か

らの政策による救済を重視しているが、この点は、非常に問題であると思う。とくに著者が、「苦汗労働者のみじめさの原因となったのは、請負制度ではなかったし、また不熟練労働者が、そのために働いていた請負業者や下請負業者も、大体において彼らを犠牲にして肥ったわけではなかった」(p. 108)とのべ、さらに「苦汗産業の使用人や仲間業者は、通常みずから巨額の利潤をえていたわけではなく、競争や労働者からの圧力におされていたために、高い賃金を支払うことができなかった」(p. 200)と述べているのは、この著者の立場をよくあらわしている。

すぐれた問題意識をもって出発しながら、本書を読むにつれてわれわれはその叙述の冗漫なものと論旨の不徹底なことに不満を抱くであろう。しかしながらそれにもかかわらず、わたくしは、本書を通じていわば危機の時代ともいべき一九〇〇年代初頭におけるイギリスの社会政策の実際を知ることができた。と同時に、わが国の社会政策が、いかに貧困をきわめているか、労働運動の危機の時代において、社会政策とは、資本制度維持のために、その体制内部から必然的に要請されるべきものとして、合理化の名による「クビ切り」であることを再認識するのみである。わが国の労働者階級の運動は、日本資本主義が深刻な矛盾に遭遇すればするほど、その「しわよせ」をうけて一層苦しくなるであろう。あたかも第一次大戦の深淵に向って急ぐイギリスの労働者階級の運動の如くに、しかし当時のイギリスには躍進をとげつつあった労働党があったの

に反し、わが国の社会民主主義政党はどうであろうか。わが国の歩もうとする途は、イギリスよりむしろワイマール共和国の転落の歴史をもつドイツの跡を、忠実に追おうとするもののようにみえる。

日本の支配者とその利益を代弁している人々が、何らかの口実をもうけて、国民の願望をまったく顧慮するところなく、われわれの祖国を誤まった方向に導きいれるときがあるとすれば、それは現在の瞬間であることを知らねばならない。何十年か経ったのち、日本の現代史において、そのような決定的に重大な時期がいつであったかが問題となるときが、幸にもあるとするならば、間違いなく一九六〇年はそれであるだろう。

(1) 雑誌「世界」四月号所収、武田泰淳氏「政治家の文章」(七) — 「政党全滅」をめぐるものもろもの文章。

— 一九六〇・四・一三 — (飯田 鼎)

ヴァンス・バックカード著
野田、小 林訳

『地位を求めぬ人々』

(Vance Packard, The Status Seekers, David McKay Co., New York, 1959.)

国民所得がふえ、鉛管工でもリムジンを乗り廻すことが出来、整骨医でも大邸宅を買うような時代に階級はあるのだろうか。生活苦の三十年代には階級差が明白に社会に現われ、一〇〇米離れても銀行家と銀行員の区別があったのに、第二次大戦後のアメリカは、四十年代の始めに比べ個人購買力は五割以上増大し、税引年取四千ドルの所得層(これはアメリカの中産階級である)は五十年からの五年間に倍増し、未曾有の繁栄を享受している。

このような時代に階級差はどうなっているだろうか。こういう問題にみちびかれた本書は、アメリカ社会階級の鋭い概念的分析であるより、アメリカ人の社会的地位観を中心とした階級行動の多方面にわたっての考察が、繁栄する表通りの裏側に深い社会的亀裂が進行しつつあるという危機意識に支えられることによって、すぐれて文明批評的品格を帯びている点にその特徴をもっている。

この特徴は本書を構成するにあたって著者の研究方法に規制されていると共に、又そこに端的に表現されている。著者は自身

のいくつかの調査に加え、欧米諸国家の有識者、専門社会学者、市場調査の専門家たち数十人と階級、階級行動について話し合い、その上、アメリカ社会階層を研究している百五十人に及ぶ社会学者、社会学者の研究成果を集め、それに著者の評価を添えることにより本書構成のプログラムをたてた。したがって、ここには自ずと、階級についての一義的な概念規定や、新しい概念の呈示といった概念的諸問題の究明は稀薄であり、その代り、意識的、無意識的にも階級観により支配されたアメリカ人の社会行動の諸様相が生き生きと画き出されることになったのである。

二

「自己が到達したいと願っている高い階層を証明し、かつ目に見える証拠でその身のまわりを飾ろうと絶えず苦勞している人」をバックカードはステイタス・シーカーといい、この人々により階級分裂がますます進行していることを強調する。彼によれば階級とは「共通した地位や起源をもち、ために他と区分され、さらにその違いや距離をむしろ強めるような生活様式を形成する人間の集団」なのである。したがって自分が他人にどう取扱われ、又逆に自分が他人をどうみるか、つまり威信を中心として階層づけられた集団が階級を構成する。そしてこの構成を決定する要因は単一でなく、職業、教育、住居、毛並み、行動、信条などの複數要因の結果なのである。これらの要因による集団区分を横の区分による階級として、人種、宗教、

皮膚の色、定住時期等の要因による縦の区分による階級構成と対比させ、横の区分による階級化を縦のそれがより強めるというアメリカ社会階級の二重構造性を指摘する。しかし、横の区分の方が経済的基礎に関係し、生活に影響を与えることが大きいから重要であるといつて、横の区分による階級構成を本来の階級と規定している。この階級概念のもとに彼はアメリカの階級構成を五段階に分ける。すなわち、純上層、半上層の二つのエリート階級と、これを支える下層の、成功を望めぬ階級(一般事務職員、職長、熟練工等)、労働者階級、純下層階級に区分けし、アメリカのさまざまな生活慣習に、これらの階級性が刻印されている状況をえがき出している。しかしこの五つに分類したのは、多くの調査に五分類がみられることが多いからというのにすぎないので、たいした論理根拠があるわけでもない。この点は、その階級概念がむしろ単なる階層概念にすぎないのと同じく、アメリカ・プラグマティズムの論理的不感症の現われである。

三

さて伝統的に西部の原野が象徴したように、自由と平等とチャンスの国としてのアメリカには、社会的接触、交流、階級上昇の大きな可能性にもとづく、又それに対する楽観主義が支配して来た。「西部」がすっかり消え去った今日でも、先にあげたように、国民所得の増大、連邦所得税の存在、大量生産による消費生活の平均化、

産業技術の革命的進歩による新職種の増加、サービス産業の拡大、大学教育機会の増加等は、富や地位の機会の開放的要素として、階級差別の消滅、全国的中産階級化へのアメリカ的信条をいよいよ強化しているようにみえる。このような階級流動性的要因に対し、それにも増して、事務所や工場の機械化による特殊熟練仕事の減少、就職前の専門教育への強い要求、技能の細分化、官僚制度の一般化、従業員と経営者の隔離、大組合による男女職場の凍結と仕事への無気力化、さらに中小企業主や独立自営業の大幅な減少等の階級固定化要因の支配が強いことに注意を向け、特にホワイトがオーガニゼーション・マンで提起した組織の巨大化がアメリカ社会組織変質の重大要因であることを指摘している。大企業、巨大政府、大労働組合、大教育制度は一方に地位の不平等化を促進し、他方、仕事の細分化、非人間化による職務の威信喪失をもたらさざるを得ない。前者は成功チャンスの喪失、後者は職業目的の見失いによる消費生活への専心を意味する。とりわけ、大企業にあっては、それ自身の階層秩序や身分の相違を示すシムボルを周囲の社会構造にそのまま押しつける作用がある。このようにしてアメリカでは、すでにヨーロッパの古い国々(イギリス・オランダ・デンマーク)が貴族的外面的階級構成の下で脱皮をはかり成功チャンスを切り開きつつあるのに、自由の装いのもとに階級構成が固定化しようとしている。そのため多くのアメリカ人が地位上昇を求め狂奔し、社会に深い裂け目が拡がりつつある。このステイタス・シーカーの狂奔のありさ

だが、地位象徴物としての住宅、自動車への渴望から始まって、交友、社交会、クラヴ、教会、言語、飲酒、結婚等の各種の日常生活形態に互つて、階級性の刻印されつつある状況の具体的展望により示されている。たとえば、アメリカ社会のエリートたるには、聖公会系の教会に行き、聖公会系を主とするいくつかの有名私立高校を出て、ハーヴァード、イエール、プリンストン、コーネル等の有名大学を卒業し、聖公会系のクラヴに入会し、高級住宅に住み、タキシードなどとはいわぬダイナー・ジャケットと言わねばならないのである。だから、単なるハーヴァード出身でなく、有名私立高校出身でなくてはならず、又単なる有名高校、大学出で有名クラヴ員であるばかりでなく、プロテスタント、特に聖公会系のプロテスタントでなくてはならない。それでアメリカ企業の上層指導者たるには、ローマン・カソリックの信者ではとても望みなく、現に殆んどユダヤ人経営者が皆無であるように、絶体的にといつてよいほど駄目なのである。われわれはすでにマックス・ウェーバーの犀利な観察と分析により、プロテスタントイイズムの諸宗派とクラヴとアメリカ資本主義のつながりの関係を知っている(M. Weber, Protestantischen Sektten und der Geist des Kapitalismus)が、ここにウェーバーの洞察のすぐれた射を射ていることの例示をみると同時に、アメリカにおける宗教の社会的支配力に驚かざるを得ない。学校、クラヴ、教会に階級性が刻印され、それが会社や銀行の

地位の上下に対応し、その間をプロテスタンティズムの社会支配力が大きく貫いているのである。それ故、プロテスタントの諸派、教会員には概して共和黨員多く保守的であり、ローマン・カソリックには下層階級や労働組合関係者が多く集まっているとしても不思議はないのである。

四

財産、職業、教育等の横の区分と、人種、宗教等の縦の区分による二面的階級構造により、アメリカの社会構成はいよいよカスト化し、それにより、特に下層階級に凍結されたものは欲求不満が一般的感情になり、経済的不況に一度びみまわれれば、産業国有化の運動が燃え上るであろうとパッカーは危懼する。今日の工場労働者は、生産面での役割を通じて出世する機会がなく、自己の職業意味を見失い、職業的関心はひたすら金銭的なものになり、成功のシムボルの獲得を消費生活の向上により埋め合わせようとする。そしてこれをマスプロと巨大広告機関が消費の大衆化を通じてあおる。そしてその結果は緊張と不満の高まりであり、平均人の不満を発生させ、彼らを熱烈な無階級社会の支持者たらしめ、ここに社会崩壊の危機がかもし出される。このようにパッカーは自由のかけに進行する現実の危機を、アメリカ人が直視し、諸階級相互の理解と出身の如何によらず人間の潜在的能力を伸張しうる教育の機会均等によって防ごうとする。そして最後に地位のシムボルやレットルによっ

てでなく、一個人としての人間的価値による評価を求めるのである。われわれはここにパッカーの危機意識が産業文明社会の人間像を欲求不満による強迫性的神経症的な人間類型として把握、社会の協同性の解体化を憂えたエルトン・メイヨーにつながるものであること、そしてメイヨー以来の多くの社会学者の危機意識が、その危機意識の源泉に向って貫かれていないことの線からパッカーも又それではないことを知る。即ちパッカーにあっては、ステイタス・シーカーをして狂奔させる社会的原動力への間は遂に発せられず終っているのである。

最後に訳文は流麗で読みやすいが、只一箇所五六頁に「この書では階級とは縦(水平)の階級を指す」となっているが、パッカーの階級規定からすれば「横(水平)の……」でなくてはならない。(ダイヤモンド社刊・B6・三三七頁・三五〇円)

(石坂 巖)

アブダル・カイアム著

『最適価格の理論と政策』

Abdul Qayum: Theory and Policy of Accounting Prices, North-Holland Publishing Company, Amsterdam 1960, viii + 130 pages, f 13.25 (\$ 3.50)

一

最適価格 (Accounting Price) という用語は、おそらく大抵の読者にとって耳新しいものではないかと思われる。もともと新しいタームは、どのような科学の領域でも、新しい分析視点を抱いたときに生れるのを常としている。われわれにとって手近かな例をあげるとすれば、ケインズ経済学が生れたときに、乗数という当時においては耳新しい分析武器が、あらたに経済学の武器庫に取められたことを想い起せばよい。ケインズ経済学の誕生を契機として、所得分析の発達がいかに著しかったかは、今日よく知られているとおりである。いわゆる補整的財政政策理論にしても、乗数という新しい分析武器が生れなかったならば、發育不全のままに終わっていたかもしれない。

最適価格政策という新しい領域の開拓とその名付け親は、ティンベルゲンに負うものであるといわれている。彼の名著の一つである「経済政策・原理と計画」をみると、とくに「投資計画の評価」をめ

ぐって、評価さるべき真の価格としての最適価格のもつ役割が強調されていることを知ることができる。しかし、最適価格の意義とその役割を見いだした功績は、もとよりティンベルゲンに帰せらるべきであるが、そのアイデアを發展させ、最適価格の一般理論のみならず、その理論を後進国の経済開発問題に適用したときの政策的意義にまで説き及んだ功績は、本書の著者であるカイアムに帰せられてしかるべきであろう。

著者は、アリガー大学(インド)の経済学講師を勤め、その後オランダに渡り、二年有余にわたってティンベルゲン教授の指導を受け、現在、オランダ経済研究所国際的安定成長研究部門に勤務し、本書のほか「Essays in Public Finance」をあらわしている。

この経歴からも推察できるように、本書の全章を貫いてティンベルゲンの影響が滲透しており、その構成はもとより、各章の論旨の運びも、問題の提起の仕方からモデル・ビルディングによる論理の構成、そこからえられた結論の検証にいたるまで、ティンベルゲンの手法とすこしも異なるところがない。それゆえ、ティンベルゲンの著書に親しむ機会をもった読者ならば、容易に著者のアイデアを把むことが期待できよう。

はじめに本書の構成の概略を紹介すると、全体はまず四部にわけられており、第一部「序論」、第二部「最適価格の導出」、第三部「最適価格の実施」、第四部「最適価格の効果」があり、さらに章別には十章にわけられている。

書 評